

Title	「おはよう」はgood morningとどう違うのか：日英挨拶表現の比較から翻訳を考える
Author(s)	小倉, 慶郎
Citation	大阪大学日本語日本文化教育センター授業研究. 2014, 13, p. 57-63
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/56942
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

「おはよう」はgood morningとどう違うのか

— 日英挨拶表現の比較から翻訳を考える —

小倉 慶郎

【要旨】

筆者の日→英翻訳の授業で、留学生、特にヨーロッパ人に、「おはよう」とgood morningの違いを説明すると少なからぬショックを受けるようだ。いままで、日本語学習の過程で「おはよう」イコールgood morningと教え込まれてきたためでもあるし、彼らは、言語的、文化的に非常に近い関係にある印欧語間の翻訳に慣れていることもある。しかし、日本に来て、朝の遅い時間に起きてきた人に対して、「遅ようございます」という挨拶を聞いたり、夜なのに「おはようございます」と言っている人に出会ったりすると、イコールどころか、全くニュアンスの違う挨拶ではないか、と気づき始めるようだ。筆者の日→英翻訳の授業では、この日英挨拶表現の違いの説明を使い、日本語・英語のような言語的、文化的に遠く隔たった言語間の翻訳は、あくまで近似値でしかない（100%ではありえない、たとえそれを目標にしても）ことを理解させるのに役立てている。筆者の日→英翻訳授業における試みを紹介したい。

はじめに

筆者の日→英翻訳の授業では、授業の導入として『イラスト日本まるごと事典』（講談社バイリンガルブックス）を使用している。秋学期の最初の授業では、その中の挨拶（greetings）の項目の日→英翻訳から始めることにしているが、最近では「おはよう」=good morningと覚えてきた留学生達に「おはよう」とgood morningの違いに触れ、異文化間の翻訳の困難さについて説明することがある。

授業中に「業界によっては、おはようございます、と夜でも挨拶することがあるのを知っているかな？」と言うと、「おかしい、変だ、正しい日本語じゃない」という顔が散見され、くすくす笑いが起こる。留学生にはこの用法はすでにお馴染みのようだ。「英語では正午までならgood morningと言っているのに、日本の普通の職場では、11時くらいになると『おはようございます』と言にくくなる、ちゃかして『遅ようございます』なんて言う人もいる。なんでだと思おう？」と言うと、今度は真剣な顔に変わる。いままで、日本語学習の過程で「おはよう」=good morningと教え込まれてきたためでもある。特に欧米人は、言語的、文化的に非常に近い関係にある印欧語間の翻訳に慣れているのでこの違いにハッとするようだ。（印欧語間の翻訳は、お互いに言語・文化的に親戚関係にあるために「直訳」するのが標準である。多少不自然なところがあっても、「直訳」で誤解が生じない程度に意味が通じるからだ。）

筆者の日→英翻訳の授業では、この日英挨拶表現の違いを説明し、日本語・英語のような言語的、文化的に遠く隔たった言語間の翻訳では、完全な翻訳はあり得ない、あくまで近似値でしかないことを理解させるのに役立てている。

本稿では、「おはよう」とgood morningという日英挨拶表現の分析・比較を試みる。そしてこれらを簡潔に説明することによって、日→英翻訳の本質を理解させるという、筆者の授業の一部を紹介したい。

1. 英語のgood morningとは

まずは、*Oxford Advanced Learner's Dictionary*でgood morningの定義を見てみよう。

used to say hello politely when people first see each other in the morning (in informal use people often just say *Morning* in this case); sometimes also used formally when people leave each other in the morning

午前中はじめて人に会った時、丁寧にあいさつするときに使う（くだけた用法として、ただMorningということもよくある）；正式な用法として、時には午前中別れる時にも使う。

午前中会った時だけでなく、「別れる時にも使う」というところに注意したい。後者の用法は、日本人にはあまり知られていない用法である。なぜこのようなことが起きるのだろうか。以下は、good morningではなくてgood afternoonの使用例であるが、梅原敏弘が実際に見聞した例である。

今夏イギリスを訪ねた際、飛行機の中でおやっと思ったことがある。成田発の飛行機がイギリスのHeathrow空港に着陸する際、ほぼ予定通りの時間に着陸予定であることやロンドンの天気や気温について説明した後、Good Afternoonと言う言葉で、機長はアナウンスを締めくくった。その言葉を聞いたとき、軽い違和感を覚えた。アナウンスの最初ならいざ知らず、最後に「今日は」と言われれば違和感を覚えるのは当然である。

「日英比較語学覚書（1）」p.7-8

なぜこのようなことが起きるのだろうか。good morningやgood afternoonが話の最後や別れる時に使っている理由は何なのだろうか。

小林祐子は次のように説明する。

まず「定型」において、英語の〈good+時〉型挨拶がすべて相手に良き時を願う祈念表現である……。

「日本人とアメリカ人の挨拶行動」（1）p.90

渡部昇一は次のように説明している。

英語でも丁寧に言いたい時には、I wish you a good morningと言うこともあるのだ。つまりこれは一種の祈願文である。朝出会った相手に、「よい朝を」と祈ってやるのである。

『英文法を撫でる』p.21

少なくとも現代英語では、good morningはI wishが省略された祈願の形と考えるのが自然である。英語母語話者は、明らかにそのニュアンスで使っているのだ。以下は、小説中の実例であるが、シャーロック・ホームズが、王様に対してお別れを言い、立ち去るときの挨拶としてwish you a good morningを用いている。

“I thank your Majesty. Then there is no more to be done in the matter. I have the honour to wish you a very good morning.” He bowed, and, turning away without observing the hand which the King had stretched out to him, he set off in my company for his chambers. [Italics mine.]

The Adventures of Sherlock Holmes by Arthur Conan Doyle

good morningは「よき朝を」と相手に祈願する表現である。だから、正午近くに言ってもいいし、別れ際に使ってもいいのである。

また使用される時間帯は、早朝から正午までが一般的ではあるが、真夜中12時（midnight）を過ぎると午前（morning）になるのですぐにgood morningということも時にはある。WikipediaのMorningの項目を見るとusage（用法）に以下のような記述がある。

The most obvious manifestation of this meaning is in English speaking countries where the greeting changes from “good night” to “good morning” when midnight passes.

この（語の）意味が明らかになるのは、英語が話される国で起きる。真夜中（12時）を過ぎると、挨拶がgood nightからgood morningに変わるのである。

これは日本語の「おはよう」では通常できない使い方である。日本語の場合、「おはよう」は早朝まで待たなければならない。

2. 日本語の「おはよう」とは

近年日本では、朝だけでなく、昼も夜も「おはよう」と挨拶する「誤用法」が広まっているようだ。日本語教育に携わる人たちの中には、この使用法に警鐘を鳴らす人もいる。

…奇妙なことに、テレビ局や劇場で仕事をする人たちは、夜であっても、その日初めて会う人には「おはようございます」と挨拶する。

「日本語・中国語における挨拶語の比較研究」p.248

芸能界・マスコミの世界では午後でも・夜でも、初めて人に会うと「おはよう」と言うが、これは特別な業界用語と考えるべきで、中国人への日本語教育の中では、誤解のないよう十分注意したい¹⁾。

「同上」p.249

学校教育の範疇では「おはよう」は朝の挨拶と教えるのは当然のことである。したがって上記の指摘は正しい。しかしなぜこのような「誤用法」が使われるのだろうか。その理由、背景を探っていくと、この挨拶の本質に迫れるかもしれない。

日本語の「おはよう」とはどういう挨拶なのだろうか。最初に『日本国語大辞典第2版』（小学館）を見てみよう。

①相手が早く出てきたことに対する挨拶のことば。＊浄瑠璃・最明寺殿百人上臈（1699頃）。女勢揃へ「いづれもこれはお早ふと、物静かに伺い候有」

②朝はじめて会った時の、挨拶のことば。＊人情本・春色恵の花（1836）二・九回「おいらんお早う。おねむそふだねへ」＊小公子（1890-92）〈若松賤子訳〉前篇・五「お早う、僕ネ、ここに居るの知りませんでしたよ」＊蘆美人草（1907）〈夏目漱石〉三「練齒磨（ねりはみがき）と白楊枝が御早うと挨拶してゐる

そして補注には「丁寧にいうときは、「ござります」「ございます」などを付ける」とある。同辞典に掲載されている追加の例も見てみよう。

①の意の例「これはおはやうございます。おつれ様はおいくたり」[滑稽本・東海道中栗毛—二・上]など。②の意の例。「おとうさん。おはやうございます」[尋常小学読本（明治36年）二]など。

「おはよう」は、江戸時代の初期に、時間を問わず早く出てきたことに対する挨拶として用いられていたのが、江戸時代後期に、朝の挨拶へと転化したのである。もともと「おはよう」という挨拶は、朝に限って用いられるものではなかったのだ。さらに同辞典では「方言」として次の定義も加えている。

①昼、夜ともに人と会った時の挨拶の言葉。

長崎県南高来郡や愛知県尾張で使用される用法である。お早うの元来の用法に戻ったようですらある。また現代日本で、飲食業界等で使われている「誤用法」と全く同じではないかと考えることもできる。こうなると、「おはよう」の底に共通して流れる含意を考えなければ、これらの現象の説明ができなくなる。日本人は一体どのような含意を感じて、「おはよう」と言っているのだろうか。

柳田国男は、日本人の挨拶では、平凡な飲み食いのほかに共通の話題が2つあるという。一つは「労働と勤勉」もう一つは「その日の天気模様の良し悪し」である。

まず第一には早朝の言葉、これは今ほとんどオハヨウの一つに統一しかかっている、それは何をいうつもりなのかも不明になりかかっていますが、本来は早く起きたねと、相手の勤勉を感嘆する意味でありました、それゆえに八時・九時に顔を洗いに出るような朝寝坊に対しては、今でも気の細かい人は、微笑を帯びてでないこの語を発しません。

『毎日の言葉』 pp.91-92

柳田の言うように、本来「おはよう」は相手の勤勉に対する感嘆であると考えれば、今までの疑問も氷解する。筆者の本務校では、午前11時頃に大学へ出勤すると、事務職員に対して「おはようございます」と言うのがためらわれるし、現在では幅広く使われるようになった夜に「おはようございます」という使用法も、本来の意味から派生しているのがわかる。さらにはお

昼近くに起きてきた寝坊ものには「遅ようございます」と冗談めかして、非難を込めていう理由も理解できる。

ここで柳田に近い解釈をしている樋口清之の言説も紹介しておこう。

「おはよう」の本来の意味は、「お早くお起きになりまして、ご健康でおめでとう」ということです。また、「よくおかせぎになっておめでとう」という意味を含む場合もあります。したがって少々遅い時間でも、相手を祝福し、励ます意味にはかわりませんから、この言葉は時間に限定されずに使われるようになりました。芸能の世界では夜会っても「おはよう」といいます。なん時に起きたかは、この場合問題になりません。その日はじめて出会った時、「おはよう」といって、相手を祝福してやるわけです。

『日本の風俗起源がよくわかる本』 p.49

樋口は「おはよう」を祝福の言葉と考えた。たしかに、そう考えても大半の例は解釈できる。しかしお昼前に起きてきた人に対して「おはよう」とは言わないとか、「遅ようございます」と非難を込めて言う理由がわからなくなる。やはり、すべての事例を説明できる柳田説が最も適切な説明であろう。

しかし、なぜそのように「勤労」が日本では尊ばれるのだろうか。その理由は日本文化の基層にあるようだ。荒木博之は『日本人の行動様式』で日本と西洋の違いを「農耕民的基層文化」と「牧畜民的基層文化」の比較の中で説明しているが、同書に基づく荒木説を紹介しながら、それを修正した筆者の説を紹介したい。

……日本の、特に農村における日常の挨拶を考えてみると、そのほとんどが勤労と集団のイメージに結びついていることに気がつく。

「お早うございます」という朝の挨拶からそれが始まる。これを「お早うございました」という英語の現在完了的な使い方という地方も多く、「お早う」という発言の中にはお互いに相手の早起きをたたえ、一日の勤労への出発を確認し合うといった意味が込められているのである。

『日本人の行動様式』 p.60

そうであれば、英語のgood morningが時として真夜中の12時を回ってすぐにも使えるのに、日本語の「おはよう」が早朝まで待たなければならない理由もわかる。真夜中すぎに農作業が始まることはない。早朝の農作業の始まりとともに「おはよう」という挨拶が可能となるのである。これは「農耕民的基層文化」というよりも、むしろ「水稻栽培的集団文化」と呼んだ方が私は良いように思う²⁾。これが「おはよう」の文化的背景なのである。

では英語でgood morningが使われる文化的背景とはどのようなものなのだろうか。荒木は次のように言う。

西欧語の場合は英語のGood morningにしる、ドイツ語のGuten Morgenにしる、すべて相手に良き朝であることを投げ合う、祈るといった意味合いだけであり、相手に良き朝であ

ることを祈ってしまえば、人と人との間のことはそれで終わってしまうのである。

『同書』 p.60

goodの語源は、*Oxford English Dictionary* (OED) によれば西暦1150年以前に使われていたOld Englishのgōdにまで遡る。ゲルマン語起源の単語である。同辞典によればgōdのもともとの意味はfitting, suitable (適した、適当な)であったという。そうであれば、昔もポジティブな意味で用いられていたということで、現在のgoodの意味と大きなズレはない。またgood morrowという形で、14世紀には使われていたこともOEDに示されている。しかし、これだけではgood morningを相手に対する「祈願」として使う背景が見えにくい。goodで始まる他の挨拶語にヒントが隠されていないだろうか。

good-byeをOEDで見ると、以下の記述がある。

A contraction of the phrase God be with you(or ye); The substitution of good- for God may have been due to association with such formulas of leave-taking as good day, good night, etc.

God be with you (神があなたといますように) というフレーズを縮めた形;God (神) が goodに置き換わったのは、別れの時に言う、good day, good nightなどの連想からかもしれない。

good-byeは「神があなたとともにいますように」という祈願からつくられた挨拶なのである。ここでいう神はキリスト教の神である。そうであれば、他のgoodで始まる挨拶も、少なくともキリスト教文化を背景とした挨拶であると推測していいであろう。

以上を総合してまとめよう。英語でgood morningという挨拶を使う背景は、荒木の言う「牧畜民的基層文化」ではなく「一神教的個人文化」にある、という説明が妥当であろう。

結語

good morningと「おはよう」の違いを、使用される時間帯、使用法、ニュアンス、文化背景に着目すると以下のようにまとめることができるだろう。

表 good morning と「おはよう」の比較

	good morning	おはよう
時間帯	早朝～正午 (時に真夜中12時過ぎに使われることもある)	早朝～10、11時ころまで (非正規用法としては昼、夜を含めて一日中使用できる)
使用法	上記の時間帯で、その日はじめて会った時、また別れる時にも使われる。	上記の時間帯で、その日はじめて会った時。別れる時には使えない。
ニュアンス	相手に対する祈願	相手の勤勉を称賛する
文化背景	一神教的個人文化	水稻栽培的集団文化

これほど違う挨拶を、意味・用法の重なっている部分を重視して、我々は同一のものとして扱っているのである。

日→英翻訳の授業時間は限られているため、上記の説明をすべて留学生にできるわけではない。ほんの一部しか話せないことも多い。しかし、これらの違いを授業中に簡潔に説明することによって、日本語・英語のように言語・文化間の距離が遠く離れた言語間の翻訳がいかに難しいものであるか、またこれらの翻訳が近似値でしかあり得ないこと（たとえ100%の翻訳を目指しても）を留学生に理解してもらうきっかけとなるのである。

注

- 1) ところが現在では、この傾向が一層強まり、学生がアルバイトをするコンビニエンス・ストア、ファースト・フード店など広い職場で、朝夕を問わず「おはようございます」と挨拶する習慣が日本で広まっている。そうであれば、留学生たちに「それは間違いです」というだけでなく、なぜそのような使い方が行われているのか、機会があれば一言添えてもいいだろう、というのが筆者の意見である。
- 2) 私は、あえてここで「農耕民族」という言葉を避けた。本センターの授業で「日本人は農耕民族だから」などと言うと、議論好きな留学生から必ず反撃を食らう。「どこの国でも農耕が基本ではないか」「日本人だけ農耕民族という理由がわからない」などの意見が飛び交うのである。日本人の農耕民族説には、留学生はなかなか納得しないようだ。今のところ、私が留学生との対話で得た感触では、日本人は、「集団主義的な水稻栽培文化を基調とする民族」と説明すると良いようだ。稲の原産地は諸説あるが、栽培に大量の水を必要とする農作物であることから、高温・多雨の風土で作られていたと考えるのが妥当であろう。少なくともジャポニカ米は、中国、東南アジアの熱帯かそれに近い地域が原産地であったはずである。その南方原産の作物を温帯の日本列島に持ち込み、長年にわたる品種改良を重ね、今や寒冷な東北や北海道まで稲作を可能にしたのである。原産地の風土からかけ離れたところで作るわけだから、手間暇がかかり、統率のとれた集団の農作業が必要となる。それが日本独特の「水稻栽培的集団文化」が形成される大きな要因となったであろう。このような文化的背景から、日本では勤勉、早起きが一種の美德として朝の挨拶にも取り入れられている、と筆者は説明することになっている。

参考文献

- 柳田国男（1964）『毎日の言葉』角川学芸出版
- 荒木博之（1973）『日本人の行動様式』講談社
- 鈴木孝夫（1975）『ことばと社会』中央公論社
- 小林祐子（1981）「日本人とアメリカ人の挨拶行動―出会いの挨拶―」東京女子大学『東京女子大学附属比較文化研究所紀要』42
- 小林祐子（1983）「日本人とアメリカ人の挨拶行動Ⅱ―別れの挨拶―」東京女子大学『東京女子大学附属比較文化研究所紀要』44
- 渡部昇一（1996）『英文法を撫でる』PHP研究所
- 皇麗梅・川本信幹（1997）「日本語・中国語における挨拶語の比較研究―中国における日本語教育の観点から―」日本体育大学紀要第26巻2号
- 梅原敏弘（2004）「日英比較語学覚書（1）」駒澤短期大学『英文学』第33号
- 樋口清之（2007）『日本の風俗 起源がよくわかる本』大和書房

（おぐら よしろう 大阪府立大学教授、本センター非常勤講師）